

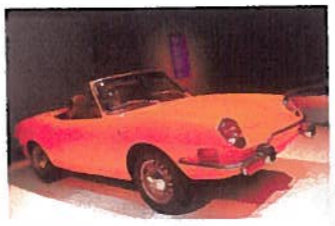
column
ベルトーネとアルファ・ロメオ



▲マリオ・リヴェッリ・ディ・ボームのスケッチを基にした8C 2500のワンオフモデル。
▶フランコ・スカリオ・ネが手掛けたジュリエッタ・スパイダーのプロトタイプ。



▲ジュリエッタ・スプリントの量産用プレス型を造る際に用いられた木型は'54年のものだ。コンピュータ支援設計なき時代の職人技術には、今日でも目を見張るものがある。
▼アルファとの関係、そして受託生産工場としての地位を固めたジュリア・スプリント・クーペは、'54~'65年に3万4000台を生産。奥は'63年のジュリア・スプリント・スペシャール。



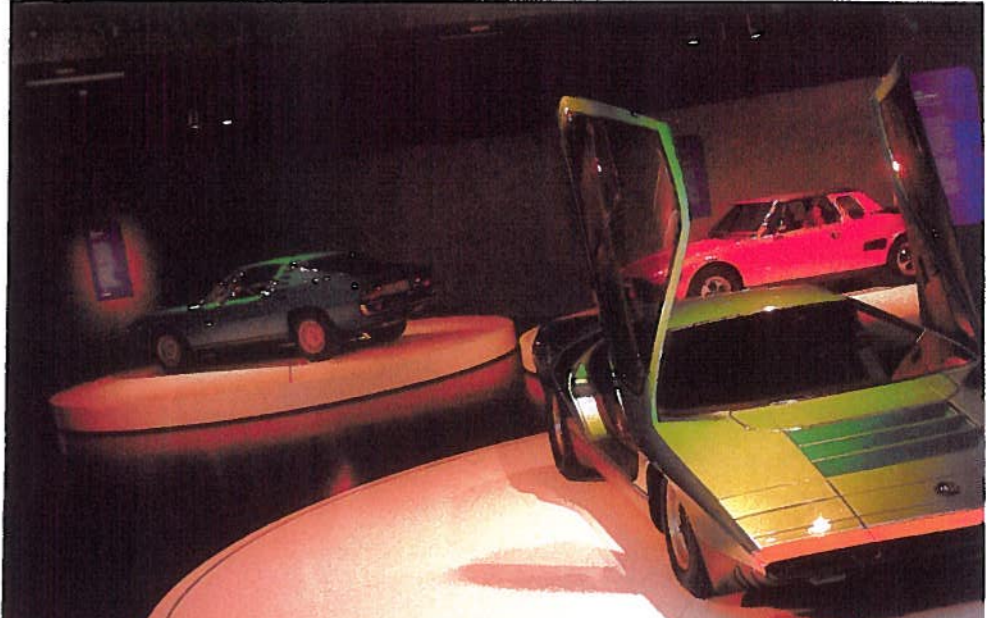
▲受託生産工場としてのベルトーネに多くのドルをもたらしたヒット作。'68年のフィアット850スポーツ・スパイダー米国仕様。
▶'67年のモンテリオール万博に出展するアルファ・ロメオの依頼を受け、デザインされたモンテリオール。'77年までに3925台を製造。



'60年のアウトビアンキ・ラファハット。エンジン：フォアアット128用を搭載。レース用ボートにイメージしたフォルムはランチア・ストラトスやフィアットX1/9の基となった。



▲44年前の作品とは思えぬ斬新さを放ち続ける'68年のアルファ・ロメオ・カラボ。「ヌッチオがいま、空の上で見ていてくれるほうがいい」と語ったのはリッツ会長。



BERTONE

100 years of car design

トリーネとの出会いという。身長2m近い彼が後年同車に乗って見たところ、84cmの高ゆえ特異な運転姿勢に当惑した様子をイタリア人顔負けのジェスチャーとともに話し、会場を湧かせた。

一方'59年から'65年までデザインディレクターを務めたジョルジュ・ジュリアーロは、OB代表としてスピーチに立った。ある日知人から「ベルトーネに面接に行ってみたら？」と誘われた彼は、慌ててスケッチを積み重ねて持って行きましたよ」と張り切る。それまで働いていたフィアットからすぐ辞職を決めた。何かしら理由を求めたものの、明かされたのは「ベルトーネの才能が羨ましい」ということ。ベルトーネに出会ってはいなかったが、私は両家になっていたでしよう」と彼の人生におけるベルトーネ時代の重要性を強調した。ちなみに彼は、ベルトーネ在籍中の代表作であり出世作でもある'63年の「テストチュード」を前述の競売で手に入れた。今回の記念展に貸し出した。

数々のカースタイリストを輩出したこの企業を端的に表現したのはリッツ会長だった。「わが社は常にイタリアの優秀性を示す大学」であり続けたのです。

最後に、ベルトーネのある古参スタッフが筆者に明かしてくれた。ちよつとい話を。経営危機で一端は会社を去った彼のもとに、ある日日本の電話がかかってきた。リッツ会長自身からだった。会社が安定したので「もう一度、会社でなさい」という誘いだ。たまたまいまや地球の裏側でもその名を知られる同社だが、イタリア企業の名に見えぬ宜である家族ムードは、脈々と生きているのである。

「トリーネの才能が羨ましい」と語った。それにしても「波乱万丈」の文字が相応しい十数年だった。'97年に2代目社長のヌッチオ・ベルトーネが82歳で逝去すると、未亡人のリッツが会長に就任。しかしケライアントである自動車メーカーがニッチカーの生産外注を縮小した結果、デザイン・エンジニアリング部門とともに会社の屋台骨であった受託生産部門「カロツツェリア・ベルトーネ」は危機に陥った。'05年には1000人規模の大規模解雇の兆しを余儀なくされた。そして'08年、カロツツェリアはついに破産に追い込まれた。工場は裁判所の管理下に入りフィアットに売却。同年はジュネーブ・ショーでの展示さえも断念した。

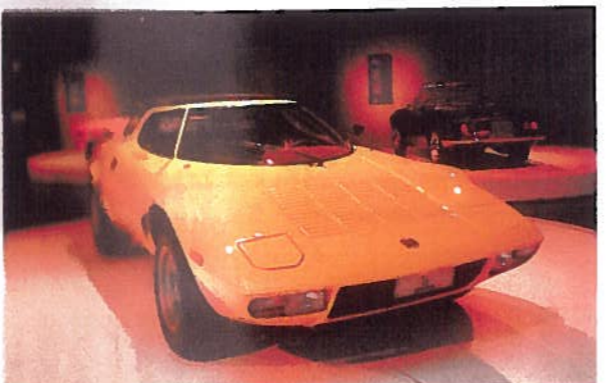
幸い'09年にリッツ会長は、裁判の末デザイン部門を継承する権利の獲得に成功した。さらに裁判所のもとにあったこれまでのコレクション車両を買い戻すことにしたが、こちらは金額と折り合わず、購入できなかったぶんは競売に付されてしまった。

そのベルトーネが6月28日、創業100周年記念展のオープニングをお膝元トリノの自動車博物館で祝った。セレモニーでは、アジアのビジネスで着実に成果を上げていることを紹介。事実、中国オフィスでは、十数名のスタッフが顧客開拓にあたりつづけている。

現在デザインディレクターを務めるマイケル・ロビンソンは、シアルトルの学生時代、図書館の本で偶然見つけた'70年のコンセプトカー「ストラトス・ゼロ」が、ベル



▶'71年のランチア・ストラトス HFストラダーレ。ジウジアローの跡を次いでチーフデザイナーを務めたマルチェッロ・カンディーニの作風を代表するひとつである。
◀今回の企画展の中での19品がこれ。フィアットX1/9の212プロトタイプで、'81年の製作とされる。



カロツツェリアの偉大なる歴史を振り返る ベルトーネ100周年記念展

イタリアを代表するカースタイリストのひとつ、「ベルトーネ」が創立100周年を迎えた。ここ数年、未曾有の荒波に揉まれた名門の記念展では、そのマイルストーンに相応しいものばかりが展示。先だって行なわれたオープニングセレモニーでは、関係者がとっておきの思い出話を披露してくれた。
フォト&レポート | 大矢アキオ | A. Lorenz OYA



生前のヌッチオ・ベルトーネが自身で所有していたランボルギーニの各モデル。手前が'66年のミウラで奥に見えるのが'85年のカウンタック。全盛期を思い起こさせる。

「作品を掻き集めて参りました」と、OJ ジェアロー(上)。ベルの出会いを喜び、OJディレクターのM.ロ



創業95周年を迎えた'07年、フィアット・パンダ100HPをベースに製作されたハルカタ(手前)。フィアットとの協業は80年以上に及び、そのプロジェクトは試作・生産型合わせて50以上を数える。



'03年のアルファGTではデザイン・エンジニアリングから試作までを担当。リッツ会長のために製作されたこのカラオレは、量産を望む声は少なかった。



アルファ・ロメオ・ファンタジックのボディをベースに10mm厚にして作り出したDB4 GTがベースのGT(右)へのオマージュ。



BMW Z8をベースに製作されたコンセプトカー。'03年のブルーザ。BMWのアイデンティティを尊重しながらも、イタリアンGTの流麗さを模索している。



アルファ・ロメオ・スプリントGTのスパイダー版として、'64年に製作されたGTCプロトタイプ。これ自体は試作で終わったが、そのデザイン性の高さがうかがえる。



※「BERTONE 100years of car design」(8月10日14日)までイタリア・トリノ自動車博物館で開催中。